

中高6年間における「心の成長過程」の分析 第2報

筑波大学附属駒場中・高等学校 生徒部
岡崎勝博・鹽谷 健・加藤裕司
石川祐爾・入江友生・仲里友一
池田千代子

中高6年間における「心の成長過程」の分析 第2報

筑波大学附属駒場中・高等学校 生徒部
岡崎勝博・鹽谷 健・加藤裕司
石川祐爾・入江友生・仲里友一
池田千代子

要約

第2報では、「心の成長過程」の調査結果を集団として類型化することにより、成長過程の違いを明らかにし、考察することを目的とした。その結果、「中学混乱期型」「高校混乱期型」「二段階混乱期型」「右肩上がり・直線型」「高3落ち込み型」「高校入学組」に類型化することができた。多くの生徒が6年間の過程で「混乱期」「落ち込み期」を迎え、自己形成を模索していることが理解される。むしろ「心の成長」にとってこのような時期を通過することが非常に意味のある過程であると考えられる。

キーワード：mental development classify mental development junior and senior high school student
analysis of the self

1. はじめに

「中高6年間における『心の成長過程』の分析第1報」(2001年筑波大学附属駒場論集41集)において、以下のことが検討された。

- (1) 中学校期の「混乱期」「不安定期」「中だるみ」の存在について
- (2) 模索期の契機
- (3) 外部生徒の本校への違和感
- (4) 同化過程
- (5) 二つの発達課題

第1報では、高校1年生(52期生)から高校3年生(50期生)までの480名を対象に、「心の成長過程」について調査を行い、上記5点について検討を行った。

分析を通じて、多くの生徒は中学校の1年の後半から2年生ころより「混乱期」を迎え、「模索期」に突入していく。この模索の過程は高校1年、2年生あたりまで継続され、そして高校3年生の文化祭後に「こころの安定度・充実度」が高くなっていると回える生徒が多い。中高校生期の発達課題が「自分くずしと自分づくり」(竹内常一)にあるという指

摘に対応する内容となっている。

この「混乱期」を起こす契機は、「自分に対する自信喪失」と「自己中心的な生徒への対応」をあげた生徒が多かった。

「自分に対する自信喪失」とは、小学校時代には勉強や学校行事、スポーツなどの面で優位に立っていたことが、この学校では簡単に優位に立てないことを自覚するところより発生している。自己の存在価値を他者との比較で形成してきている者が多いので、劣等感をもったり自己不信に陥ったりしている。ある生徒の例では、中学1年の後半より「自己崩壊(自己不信、他者比較)」となり中学2年の中期から3年の中期まで「自己の再構成開始(自信の獲得、自分は自分)」と記述している。

「自己中心的な生徒への対応」では、期待を膨らませて入学したが、周りの生徒の自己中心的な行動・態度への対応から「混乱期」を迎える契機となっている生徒もいる。

「僕は筑駒生への不信感を強め『こいつらは絶対信用しない』と決めて自分の周りに高い壁を築いてそこに閉じこもった」と記述している。

もっともこれらの契機の底には、思春期の入り口

にさしかかった子ども達の生理的、生物学的な変革（反抗期）が横たわっていることは言うまでもない。

「模索期」では、気の合う仲間づくりなど「集団内での自己形成」がはかられたり、クラブ活動で上級生との繋がりの中で視野を広げたり、支援されたり、目標を作ったりしている。また学校行事においても自分の役割を見つけたり、信頼の置ける仲間づくりにより自己形成が模索されている。

高校では、2年生頃より「自己拡大」と解釈されるような変化を示す生徒がいる。これは、学問に興味を持ったり、学校外の人間関係の中で再度「自分の見つめ直し」を行っている。現象的には、仲間集団が変わったり、クラブ活動を変えたりする時期でもある。

このように、中高6年間の「心の成長過程」は複雑であり、けっして直線的に右肩上がりには進まない。むしろ、直線的な右肩上がりの成長こそ問題があると考えられる。それは、中高校生期が第二の人生のスタートであり、生まれ変わりの時期だからである。小学生期の親に保護され、包まれて生きてきたところより、精神的に自分の足で立ち上がり、歩き出そうとするからである。そのための自立過程はそれほど簡単ではなく、多くの試行錯誤と時間が必要となる。

子ども達がどのようなジグザグしたコースをたどり成長していくのか。それを理解することは、指導のうえで非常に重要な問題であると考えている。

2. 1 本研究の目的

第1報では本校生徒の「心の成長過程」の特徴を5つの観点より概観した。第2報では、「心の成長過程」の調査結果を集団として類型化することにより、成長過程の違いとその原因について考察することを目的とした。もちろん「心の成長過程」は、その質において一人一人个性的であり、異なっている。しかしその変化を量的に捉えれば、ある程度の類型化も可能であり、一般化するためには必要な作業である。

ここでは、生徒を集団として捉えた場合、そこにはどのような類似点と相違点があるのかを検討することを目的とした。

2. 2 調査対象

ここでは類型化を目的とするため、6年間の変化が全て表れている高校3年生（50期生）156名の調査結果を対象とした。

【内 訳】

連絡進学者（中学より入学）：119名

高校入学者（高校より入学）：37名

3. 1 結果及び考察

類型化

| | |
|------------------|----------|
| (1)中学混乱期 | 56人 (47) |
| ①中学2年ピーク | 24人 (20) |
| ②中学3年ピーク | 32人 (27) |
| (2)高校混乱期（高1・2年時） | 20人 (17) |
| (3)二段階混乱期 | 16人 (13) |
| (4)右肩上がり、直線型 | 17人 (14) |
| (5)高3落ち込み型 | 10人 (8) |
| (6)高校入学組 | 37人 |

()の数値は119名に対する%

(1) 中学混乱期型（図1、2）

中学生の時期に落ち込み、その後は順調に成長していると答えた者。56人と最も多く、高校入学組を除いた総数の約47%にあたる。

ただ、混乱期の時期が中学2年生頃をピークとする者と中学3年生頃をピークとする者がおり、その理由も異なっている。中学2年生をピークとする者は「反抗期」をその理由としてあげている者が多い。中学3年生をピークとする者は、「中だるみ」、「クラブ引退」、「反抗期」などをあげる生徒が多くなっている。

新しい自分をつくるにはどこかに居場所となるベースが必要である。それがクラスやクラブ活動であったりする。

「入学時は不安であったが、部活という居場所を見つけ、そこに身をうずめながら生きてきた」

「中学時代は自分をどこにおけばよいかわからず混乱した」

後者の意見は、中学生期の「居心地の悪さ」「身の廻し方の難しさをよく表している。また、心が閉じこもっていくという感覚では次のような記述もある。「中2の夏にひどい孤独感におそわれ、『人生って何?』 家に閉じこもり暗い人間になる。」

いずれにしても、この自分をくずす時期は混沌とした状況で、本人にもその苦しさの原因がよくわかっていない場合が多い。

(2) 高校混乱期 (図3)

中学3年の後半頃より落ち込み、高校1年生あたりが落ち込みのピークとなるパターン。「クラブの引退」による虚脱感や「中だるみ感」「無気力感」などの理由をあげる生徒が多くなる。中には、「はじめて五月病になった」と答える生徒もいる。もちろん新たに高校から入学した生徒の加入で友達関係が変わったり、クラブを変えたりして意欲を新たにしている生徒も多くなる。

「無気力期」(自信喪失)としている生徒は、次のように答えている。

「高1から高2にかけて強烈な自己嫌悪におちいった。多分中3の時の立場の弱さも影響しているだろう。高2からは将来の夢を見つめ直すと、いい意味で開き直れたので、安定しはじめた」

五月病になった生徒は、次のように答えている。

「高1の頃は、最初はいつもブルーでした。五月病になった。そのうち中3の頃の友達の所へ行き飯を食うようになり治った。ギターばかりしていた」

この生徒の場合、「古巣」に戻って羽を休めるという印象である。また、この時期を抜け出す契機に新たな友人や学校外の友人、委員会活動、学校行事、新たなクラブ活動、学問などをあげる生徒も多い。

(3) 二段階混乱期型 (図4)

このパターンは、中学混乱期型と高校混乱期型を併せた形となっている。また、中・高の落ち込みの理由も同じようなことが理由としてあげられている。

ここで、なぜ二段階混乱期型を示すのか、その理由は今のところ不明である。もともと、中学混乱期型や高校混乱期型も二段階の混乱期を迎えているのかもしれないが、それが調査には表れてこないのか、あるいは中学混乱期が不十分だったために高校でも混乱期となったのか、今後検討しなければならない課題である。

(4) 右肩上がり、直線型 (図5)

心の成長過程において、あまり落ち込み時期が見られないものを類型化した。それぞれの時期に混乱や落ち込みはあったのであろうが、それほど取り立てて表現する必要がないと考えられているのかもしれない。

ただ記述を見ると、友人関係が安定していたり、部活動にずっと打ち込んできたり、新たな友人関係が結べたり、趣味が広がったりと自分の周りの関係

が良い状態で回転しているように感じられる。あるいは意識的に切り替えよく良い状態にしているのかもしれない。諭えるなら、小爆発を繰り返しながら大爆発に至らなかった生徒達とも考えられる。

(5) 高3落ち込み型 (図6)

高校2年の後半から高校3年にかけて落ち込んでいるパターン。落ち込みの主な理由は、「成績の低下」「進路」「自分の能力」などをあげる生徒が多い。

(6) 高校入学組

高校入学組の多くの生徒は、本校に対して違和感を持ち、不安定な時期を過ごす。しかし、多くの生徒が高校1年の終わりから2年にかけて同化している様子もうかがえる。

本校に対する違和感の内容については、第1報で報告したとおり肯定的意見として「学力面で優秀」「誰もがリーダーシップを取れる」「画一的でない」「行事への意欲」「HRでの一体感」「生徒が均質でやりやすい」などの意見があげられている。

否定的意見では、「価値観が固まり、柔軟性がない」「自己主張が強い」「人の話を聞かない、他人を馬鹿にすることがある」「ルーズ」などの意見があげられている。

どちらの意見も、本校生徒の特徴を浮き彫りにした内容であった。

3. 1. 2 考察

本研究では、高校3年生(50期)を対象に6年間の「心の成長過程」の類型化を試みた。それは、第1報では「心の成長」における変化の特徴を捉えることに主眼が置かれ、生徒全体の傾向をつかむことができなかったからである。個々の生徒の発達は個性的ではあるが、集団として発達傾向の特徴を把握することは可能であるし、指導上非常に重要な情報ともなる。

全体の傾向を見ると、当然のことであるが、この激動の思春期の間に「落ち込み」「混乱期」を多くの生徒が迎えている。高校3年生119名中(高校入学生とを除く)102名、85%の生徒が、中学か高校のいずれかの時期に「落ち込み」「混乱期」を経験している。

この「落ち込み」「混乱期」は、小学生までの自己をくずし、改めて自己形成するためには必要不可欠な過程である。それは落ち込みのピークから改善

に向かう契機のなかで、実に多くの体験や経験、人や学問との出会いのなかで新たな自己形成の模索が行われているからである。

教員の経験的な観察からは、むしろ早い時期での「くずれ」は、その後の自己形成にとって、よりスムーズな展開になると考えている。

ただし、生徒の「くずれ」をただ単に見過ごしては、生徒の自己形成にとって良くない影響を及ぼすこともある。必要以上には指導や指示は出さないが、「いまこの生徒はどのような状況にあるのか」「それがどのような原因によりもたらされているのか」等を複数の教師の眼を通して理解しておくことは不可欠である。そして、人格形成上危険な場合には、即座に介入していくことが必要となる。

例えばそれは、友人との人間関係であったり、行事を進める上でのクラス内でのトラブルであったり、クラブの友人関係、上下関係であったりする場合がある。また、教師の指導の限界を超え、むしろ速やかな医療的措置が必要なケースもある。

いずれにしても、6年間の心の成長過程を把握しておくことは、生徒の心の成長を促す上でも、また精神衛生上の危険を回避させる上でも非常に重要な教育活動であると考えられる。

4. 1 本調査の有効性

本調査の有効性を調べるために「6年間の心の成長」についてのアンケートを行った。

対象は51期高校3年生、145名である。

(調査実施：2002、12)

4. 1. 2 アンケート結果

質問1 3年間、あるいは6年間の自分の精神の発達を振り返ることができましたか。

| | | |
|--------------|-----|-----|
| 1. よくできた | 42人 | 30% |
| 2. まあまあできた | 73人 | 50% |
| 3. あまりできなかった | 22人 | 15% |
| 4. 全然できなかった | 8人 | 6% |

質問2 自分の精神的な成長について、振り返ることは必要だと思いますか。

| | | |
|-------------|-----|-----|
| 1. とても必要 | 39人 | 27% |
| 2. まあまあ必要 | 71人 | 49% |
| 3. あまり必要でない | 24人 | 17% |

4. 必要でない 11人 8%

質問3 「6カ年の心の成長」調査で、自分の精神の発達をどの程度表すことができましたか。

| | | |
|--------------|-----|-----|
| 1. 充分表せた | 15人 | 10% |
| 2. だいたい表せた | 61人 | 42% |
| 3. あまり表せなかった | 49人 | 43% |
| 4. 全然表せなかった | 19人 | 13% |

質問1より、「3年、6年間の心成長」を振り返ることができたとする生徒は、115人 80%にもなっている。そして質問3でこの調査方法について尋ねた回答では、76人 52%の生徒が「心の成長過程」を表せたとしている。

かなりの生徒が「心の成長過程」について振り返りながら自己分析をおこなったものと考えられる。また、調査方法についても約半数の生徒が「心の成長過程」を表せたとしている。もとより、自分の心の成長を十分に表せる調査方法はないといえる。個人にとってみれば、どこか言い足りない部分は残る。そのことを考えると半数の支持があったということは、調査方法としてかなり妥当な方法であったと考えられる。

また、このような調査は、単に調査だけでなく教育的意味を持ち合わせている。それが、質問2の回答になっており、110人 76%の生徒が「自分の精神的な成長について振り返ることが必要」と回答している。

5. 1 今後の課題

本調査は、本校生徒の「心の成長過程」を比較的よく表せる調査方法であり、今後も継続して調査していくことが必要である。今後の調査活動において以下のことが課題としてあげられる。

- ① 調査では、「こころの安定度」が縦軸に設定されている。しかし、生徒へのアンケートの説明では、「安定度」であり「こころの充実度、成長度」の両面を示すものとして記述を依頼している。実際、生徒の成長過程はこの両面を含んだ曲線になっている。この方法でも両面は読みとれるのであるが、統一した指標とすることが望まれる。どのように統一した概念で示すのか検討を要する。

- ② 本校以外の生徒との比較を試みることにより、この調査方法の有効性を検討すること、及び本校生徒の特徴を明らかにすること。特に、中高一貫校での「育ち」にどのような特徴があるのかを明らかにすることは、教育制度を考える上で非常に重要な問題になる。
- ③ 「心の成長過程」の記述の「ふれ」を検討する。
例えば、高校1年次に記述した「中学校期」と同じ人が高校3年生になり記述した「中学校期」に、どのような違いがあるのか検討する。
成長するに従い、「心の成長」を捉える視点が変わってくると思われる。
- ④ 本調査を中学1年生に実施し、小学校時の「心の成長過程」について記述が可能かどうか検討する。
仮説として、中学受験は心の成長を促進する傾向にあり、「反抗期」の時期を早めるのではないかと予想される。本校は全ての生徒が早期からの塾通いを行っている。その影響がどのように表れているのか検討する必要がある。

図1. 「中学混乱期型」 (中学2年生がピーク)

*以下の図は、該当する生徒の曲線をトレースし、それらを重ねほぼ中央の曲線を描いて作成した。

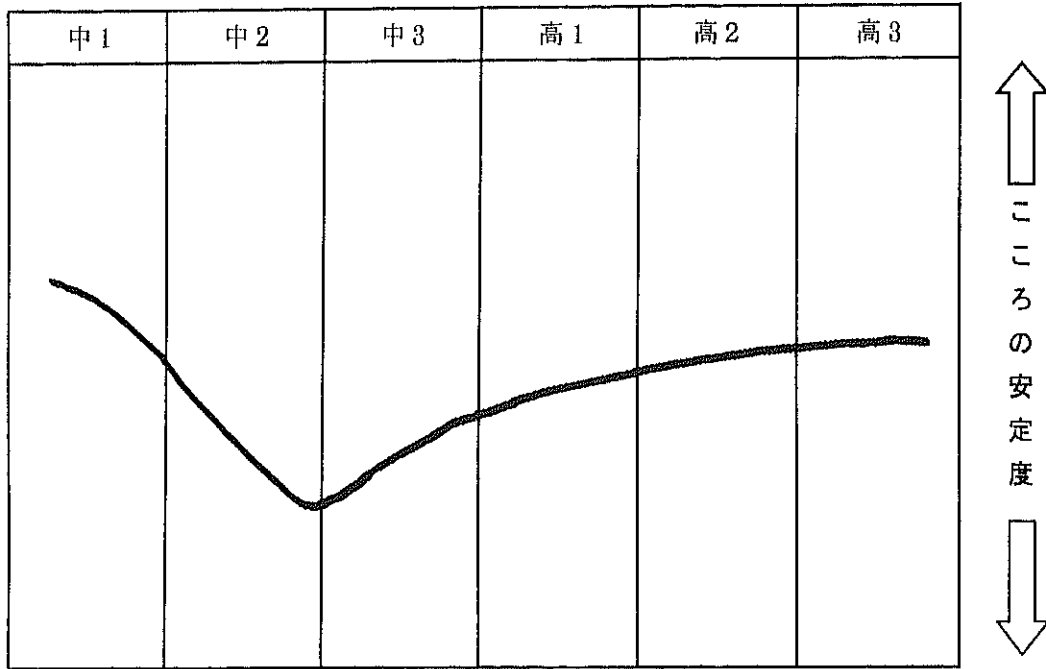


図2. 「中学混乱期型」 (中学3年がピーク)

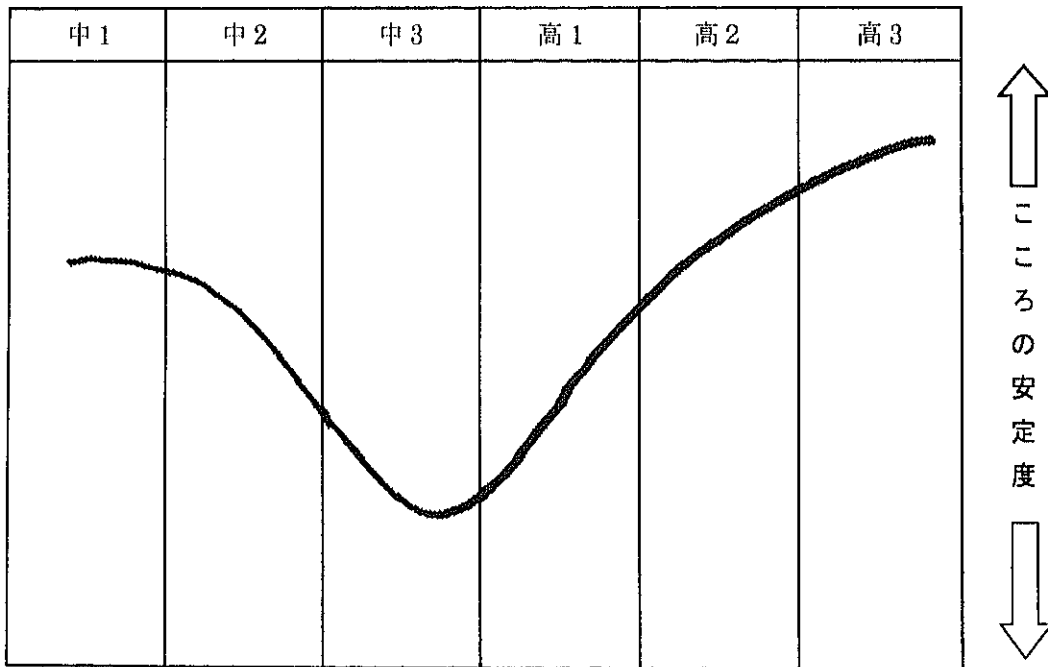


図3. 「高校混乱期型」

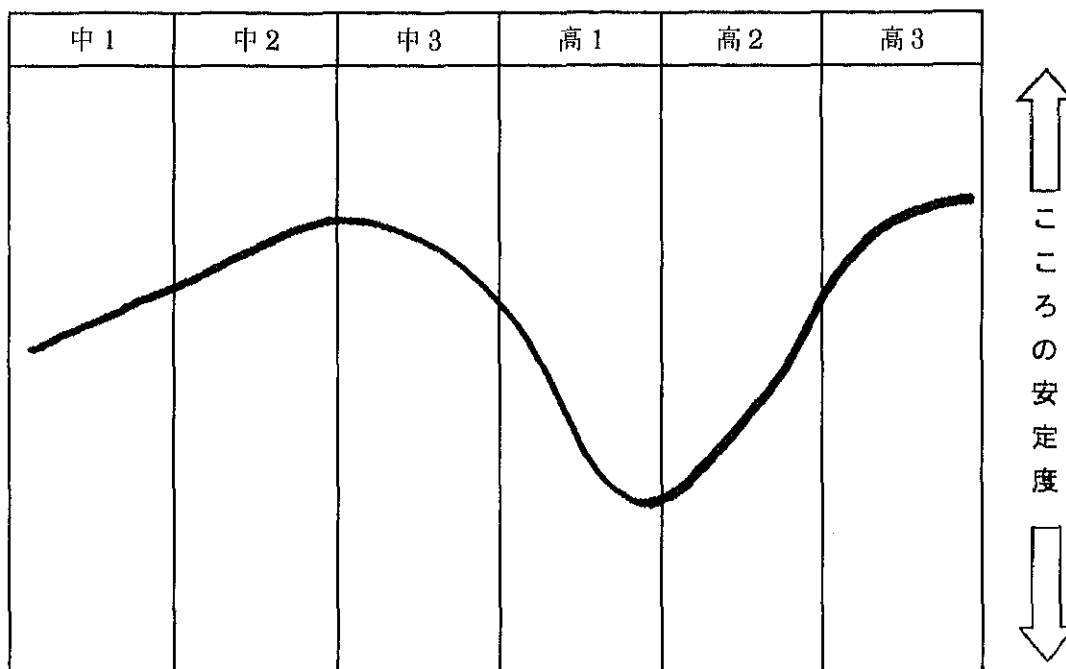


図4. 「二段階混乱期型」

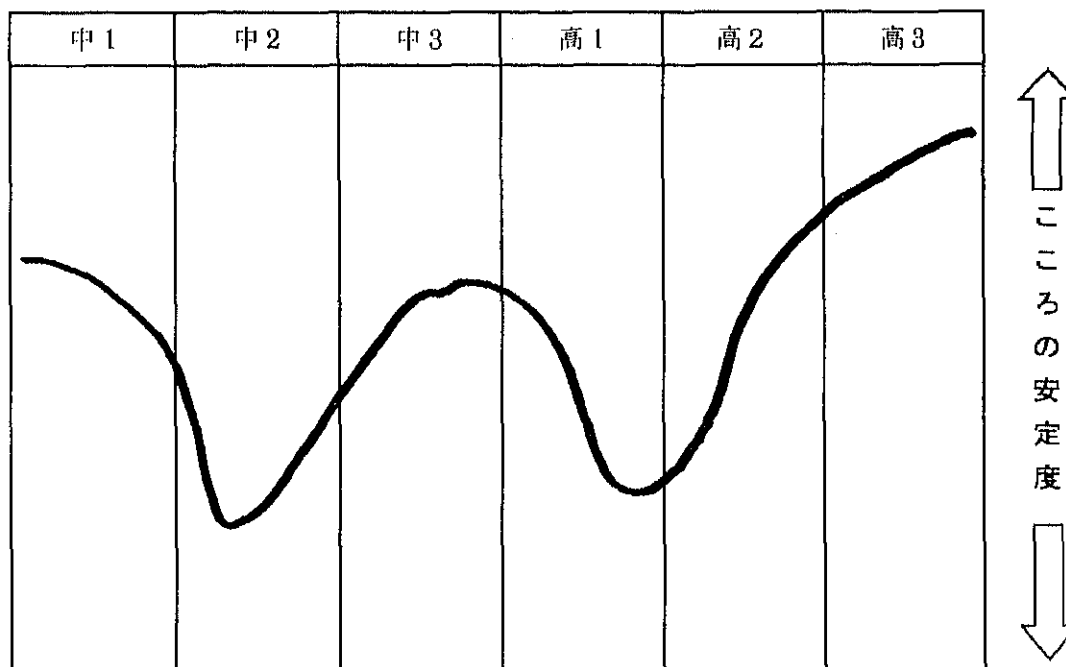


図5. 「右肩上がり、直線型」

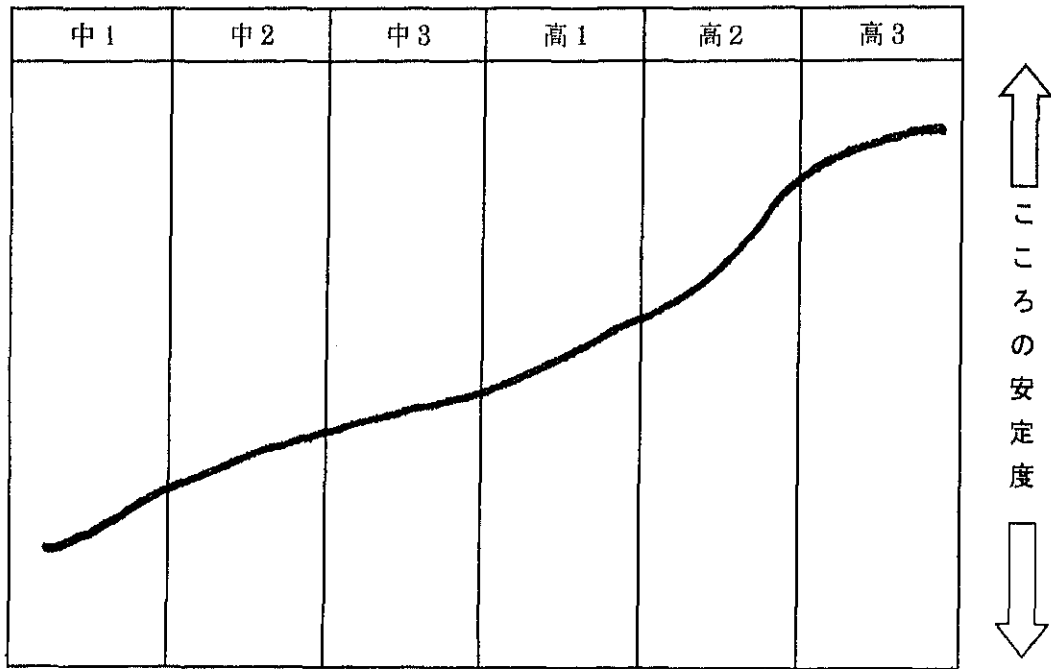


図6. 「高3落ち込み型」

